

公益社団法人私立大学情報教育協会
平成 27 年度第 2 回情報教育研究委員会分野別情報教育分科会 議事記録

- I. 日 時：平成 28 年 2 月 6 日(土) 11:00 から 13:00
II. 場 所：私立大学情報教育協会事務局会議室
III. 参加者：児島主査、徐委員、角田委員、阿部栄子委員、大谷委員、武藤アドバイザー、
渡辺アドバイザー (Skype)
事務局：井端事務局長、野本

IV. 検討事項

情報リテラシー教育と分野固有の情報活用教育の連携をどのように行うのかをとりまとめる必要がある。情報リテラシーのガイドラインは、問題発見・解決を思考できる枠組みを理解させ、倫理や情報の科学などの学びを含めて構成しており、授業モデル案の検討を進めている。そこで専門分野ではどのような授業モデルが考えられるか検討を行った。

また、分野固有の情報活用教育を推進・普及するための課題について整理を行った。

1. 分野固有の情報活用教育を推進・普及するための課題について

- ・ リテラシー教育での問題発見・解決を思考する枠組みを分母にして、その上に専門の教育で、分野固有の情報活用能力を身につけて卒業させる必要がある。
- ・ 4 年間を通じて情報活用教育をどのように行っているかマップを備えておく必要があるのではないか。
- ・ 一部の学部でプレゼンテーションやデータ活用などの教育を強化したことがある。
- ・ マッピングは、学年や全学では科目が多いためグラフ表現などになる可能性あるが、学科単位で検討してはどうか。
- ・ 総合大学と単科大学では違いはあるが、学部に応じたものを使った授業、同じ到達目標でも授業の内容は分野固有で行ったほうが教育効率が良いのではないか。
- ・ 共通的な授業モデルを作るのではなく、文系、理系の初年次モデルを作る必要があり、15 週の設定ができない場合も想定されることから、2・3 コマでできるようなモデルを検討する必要がある。
- ・ 大学によって、リテラシー教育や初年次教育の捉え方に違いがあり、2 年生にかかるものもあるのではないか。
- ・ リテラシーの部分は初年次教育などで対応できるが、さらに専門知を入れて本当の情報を活用することでイノベーションにつなげ新しい価値を作り出すところまで学問分野ではイメージをしていくと考えられる。
- ・ 情報教育の実践で不足している教育がある場合には、自大学として授業開発する方法やアーカイブされた他大学の授業を利用するなどの対策が考えられる。

2. 情報リテラシー教育の授業モデルについて

- ・ 文系の例として、まちづくり提案の事例が紹介された。市町村の人口や年齢、施設などの調査からデータをまとめて発表する問題提起までのイメージ。例えば、2 年生で専門知を取り入れてから課題設定、課題解決の仮説、課題解決に向けたモデルができれば、合計 6 コマで、問題発見から解決までの流れを訓練できるのではないか。

- 工学系の例として、エネルギーのテーマ設定が紹介された。日本のエネルギー不足を考えて提案するイメージ。エネルギー利用の状況を調査し、問題の出し方でデータベースの活用を理解させる。日本のエネルギーはどのような構成が良いのかチームで提案、ディスカッションを進める。予測推測、推測の先に技術的・社会的な問題と制約条件、リスクがあり、制約条件の中で絞られ合理的思考につながる訓練になる。
- 理系の例として、協働の態度とプログラミングを学ぶ事例が紹介された。セキュリティや倫理関連の課題について単独と協働での作業結果比較から価値を認識させる。また、グループでプログラムの解説をさせ、教え合い学び合いを図る。
- 医療系の例として TBL の事例が紹介された。心肺蘇生の手順に関してグループでの問題発見を通じて知識と技能の確認・定着を図る。
また、薬学では薬の説明書作成に関してグループで情報内容の吟味から発表がイメージされた。
- 栄養学系の例として、データ処理実習とグループでの問題発見・解決の取り組みが紹介された。アンケートの作成、集計、分析、発表を通じた実習で情報の活用力を養う。また、グループで平均寿命の比較から解決策を検討し社会での取り組みを踏まえて合理的な判断を通じて管理栄養士としての方策を提案する。

V. 今後の予定

- 今回の授業モデルを更新し、リテラシ分科会に提出を予定している。また、次年度は情報リテラシー・情報倫理分科会との合同での開催をすることになっている。